



ドイツに学ぶ

●
阿部 孝夫
(群馬県)

家人から日頃「あなたは外見が全く東洋人なのに頭の中はドイツ人？」と皮肉で言われる。ドイツのある会社から私の勤めている会社が50年ほど前に技術導入をしたため、しばしばドイツに出かける機会があり、いまでもドイツ人の友人がいる。その友人が古くからミュンヘンの南、約150kmのチロール地方に山小屋を借りて持っている。何回か誘われて数日間ずつ過ごした時の出来事を二つだけ紹介する。その山小屋はインスブルックを経て、イタリアに通じるアウトバーンをはるか下に見る牧草地の高台にある。山小屋には電球と水道を除いて、電話をはじめ電化製品は全くなかった。

一つ目は夏の話。その日の朝、小屋に通じる道路路上に水道から長さ数十メートルの黒色のホースが短冊状に往復で並べられていた。昼過ぎになって彼は裸になり、全身にシャボンをかすりつけた後、太陽で暖められたホースから出る温水で石鹸を洗い流した。山小屋での生活は10日、20日、1ヶ月の単位であり、日本人ならば自宅に戻ってお風呂に入ってからまた山小屋に出直してくると思うが、そんなことはしない。寒い時期になると複数の部屋の角が煙道になって暖められるペチカ風の暖房設備になっている。燃料には薪を使うが、農場主の許可を得て近隣の山々の枯れ木を夏のうちに集めて、薪作りをする。それを手伝ったこともある。

二つ目は冬の話。山小屋からの帰り支度のとき凍結防止のため水道の水を落としたり、吹雪対策で木の防風窓を閉めるなどの作業が終わるのを待ちながら、私は多少気を利かしたつもりで、車の暖気運転をした。日本では寒いときなどエンジンが突然止まることがあり、アイドリングは常識と思っていたが、彼がやってきて「とんでもないことをしてくれた。現代の車にアイドリングは必要がない。」と言う。その車は日本製で4輪駆動のスポル車だった。そのころ4輪駆動は珍しかった。

雪の山道でその車の性能の良さにはドイツ車が追いついていないと彼は言っていた。日本人の自分が知らないことをドイツ人が評価してくれている。ようやくアイドリングは無駄であることも納得した。

この二つの話を讀まれて、あの高級車のドイツのイメージと落差があり、私の友人は少し変わり者ではないかと思う人もいるかもしれない。そこで日本の日常生活と現在のドイツ人の生活の違いを少し述べて、私の友人が変わり者ではないことを理解していただこう。

私は群馬県の田舎に住み、2kmの田んぼ道を歩いて通勤しているが、寒い季節になると、途中の家々の駐車場では車の暖気運転をしている。3分間手袋をしてハンドルを握っていれば車内は暖まるのだが、朝食の時間に延々とエンジンをかけている。日本のエネルギーの自給率が4%でしかないことを知っている人もいると思うが、それにどんな意味があるのかを我々は考えていない。ドイツでは基本的に夜の労働は禁止されているので、24時間営業のコンビニは存在せず、スーパーマーケットで買い物をする。日本では山里にもある自販機はドイツでは市中にも全くないので、ビールのアルミ缶やペットボトルは目につかない。生ビールは勿論グラスであり、ビールは全て瓶ビールであり、ジュースや飲料水も全てガラス瓶である。最近はガラス瓶の輸送に費用がかかるので飲料用に硬質のペットボトルを洗浄して繰り返し使用することも始めたようだ。ドイツは石炭を除いて日本と同様に資源の無い国で、国民一人ひとりが米国の浪費文化を真似ない意思を持っているように見える。ドイツの食料自給率(カロリー換算)が93%に対して、日本はわずか40%だ。それなのにコンビニなどでは賞味期限と称して輸入した食糧の30%が捨てられているという。際立ったムダの一つは食料品の過剰包装だ。私の住んでいる町にも昔から有名な煎餅がある。以前は10枚を簡素な紙で包んでいたが、今は時代の風潮に乗り一枚一枚ビニールで包装され、中味は見え、高級煎餅のようにみせかけ、しかも中包み、外箱、包装紙そして手提げ袋と5重包装になった。それが日本文化と言う人もいるが、目に余る小さなムダを見直し、公共施設の充実や断熱住宅など耐久

性のある方向に振り向きたいものだ。

ドイツ人は、未来に向ってある決心をしているように見える。その一つの証拠が自然エネルギー、とりわけ太陽電池で発電した電力を高く買い取る「固定価格買い取り制度」を法律にしていることだ。5年前に発足した時には我々が購入する価格の3倍程度で、電力会社が買い取っていた。太陽電池の普及によって太陽電池の価格が下がり、多くの人が買えるようになる。50年後には石油も天然ガスも確実に減っている。我々が行政にいろいろ要求するのは当然だが、それ以前に一人ひとり、あるいはお互いに話し合って消費についての自覚を高め合っていくことが大切ではないだろうか。

このような低消費（低エネルギー）社会の実現が自然保護・保全につながる。

(2010/02/12)